

一寸法師

楠山正雄

青空文庫

むかし、摂津国の難波という所に、夫婦の者が住んでおりました。子供が一人も無いものですから、住吉の明神さまに、おまいりをしては、

「どうぞ子供を一人おさずけ下さいまし。それは指ほどの小さな子でもよろしゅうござい
ますから。」

と一生懸命にお願い申しました。

すると間もなく、お上さんは身持ちになりました。

「わたしどものお願いがかなったのだ。」

と夫婦はよろこんで、子供の生まれる日を、今日か明日かと待ちかまえていました。

やがてお上さんは小さな男の赤ちゃんを生みました。ところがそれがまた小さいといつて、ほんとうに指ほどの大きさしかありませんでした。

「指ほどの大きさの子供でも、と申し上げたら、ほんとうに指だけの子供を明神さま
が下さった。」

と夫婦は笑いながら、この子供をだいじにして育てました。ところがこの子は、いつまでたつてもやはり指だけより大きくはなりません。夫婦もあきらめて、その子に一寸法師と名前をつけました。一寸法師は五つになつても、やはり背がのびません。七つになつても、同じことでした。十を越しても、やはり一寸法師でした。一寸法師が往來を歩いていると、近所の子供たちが集まつてきて、

「やあ、ちびが歩いてる。」

「ふみ殺されるなよ。」

「つまんでかみつぶしてやろうか。」

「ちびやい。ちびやい。」

と口々にいって、からかいました。一寸法師はだまつて、にこにこしていました。

二

一寸法師は十六になりました。ある日一寸法師は、おとうさんとおかあさんの前へ出て、

「どうかわたくしにお暇ひまを下さい。」

「いいました。おとうさんはびつくりして、

「なぜそんなことをいうのだ。」

と聞ききました。一寸法師いっすんぼうしはとくいらしい顔かおをして、

「これから京都きょうとへ上のぼろうと思おもいます。」

「いいました。」

「京都きょうとへ上のぼつてどうするつもりだ。」

「京都きょうとは天子てんしさまのいらつしやる日本にっぽん一の都みやこですし、おもしろいしごとがたくさんあ

ります。わたくしはそこへ行うつて、運うんだめしをしてみようと思おもいます。」

そう聞きくとおとうさんはうなずいて、

「よしよし、それなら行いつておいで。」

と許ゆるして下くださいました。

一寸法師いっすんぼうしは大たいへんよろこんで、さつそく旅たびの支度したくにかかりました。まずおかあさんに

ぬい針はりを一本頂ほゆいて、麦むぎわらで柄えとさやをこしらえて、刀かたなにして腰こしにさしました。それか

ら新あたらしいおわんのお舟ふねに、新あたらしいおはしのかいを添そえて、住吉すみよしの浜はまから舟出ふなでをしました。

おとうさんとおかあさんは浜^{はま}まで見^み送^{おく}りに立^たつて下^{くだ}さいました。

「おとうさん、おかあさん、では行^いつてまいます。」

と一寸法師^{いっすんぼうし}がいつて、舟^{ふね}をこぎ出^だしますと、おとうさんとおかあさんは、

「どうか達^{たつしや}者^{じや}で、出^{しゅつせ}世^せをしておくれ。」

といいました。

「ええ、きつと出^{しゅつせ}世^せをいたします。」

と、一寸法師^{いっすんぼうし}はこたえました。

おわんの舟^{ふね}は毎^{まいにち}日^{すこ}少^{すこ}しずつ淀^{よど}川^{がわ}を上^{のぼ}つて行^いきました。しかし舟^{ふね}が小^{ちい}さいので、少^{すこ}し風^{かぜ}が強^{つよ}く吹^ふいたり、雨^{あめ}が降^ふつて水^{みず}かさが増^ましたりすると、舟^{ふね}はたびたびひっくり返^{かえ}りそ
うになりました。そういう時^{とき}には、しかたがないので、石^{いしがき}垣^{あいだ}の間^まや、橋^{はし}ぐいの陰^{かげ}に舟^{ふね}を止^と
めて休^{やす}みました。

こんな風^{ふう}にして、一^{ひと}月^{つき}もかかつて、やつとのことで、京^{きやうと}都^とに近^{ちか}い鳥^{とば}羽^はという所^{ところ}に着^つ
きました。鳥^{とば}羽^はで舟^{ふね}から岸^{きし}に上^あがると、もうすぐそこは京^{きやうと}都^との町^{まち}でした。五^ご条^{じやう}、四^し
条^{じやう}、三^{さん}条^{じやう}と、にぎやかな町^{まち}がつづいて、ひっきりなしに馬^{うま}や車^{くるま}が通^{とお}つて、おびただ
しい人が出ていました。

「なるほど京都は日本一の都だけあって、にぎやかなものだなあ。」
 と、一寸法師は往來の人の下駄の齒をよけて歩きながら、しきりに感心していました。

二三 条まで来ると、たくさんりっぱなお屋敷が立ち並んだ中に、いちばん目にたつてりっぱな門構えのお屋敷がありました。一寸法師は、

「なんでも出世をするには、まずだれかえらい人の家来になって、それからだんだんに上げなければならぬ。これこそいちばんえらい人のお屋敷に違いない。」

とおもって、のこのこ門の中に入っていきました。広い砂利道をさんざん歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の宰相殿といって、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

そのとき一寸法師は、ありつたけの大きな声で、

「ごめん下さい。」

とどなりました。でも聞こえないとみえて、だれも出てくるものがないので、こんどはいつそう大きな声を出して、

「ごめん下さい。」

とどなりました。

三度めに一寸法師が、

「ごめん下さい。」

とどなった時、ちようどどこかへおでましになるつもりで、玄関までおいでになった宰相殿が、その声を聞きつけて、出てごらんになりました。しかしだれも玄関には居ませんでした。ふしぎに思つてそこらをお見回しになりますと、靴ぬぎにそろえてある足駄の陰に、豆粒のような男が一人、反り身になつてつつ立っていました。宰相殿はびつくりして、

「お前か、今呼んだのは。」

「はい、わたくしでございます。」

「お前は何者だ。」

「難波からまいりました一寸法師でございます。」

「なるほど一寸法師に違いない。それでわたしの屋敷に来たのは何の用だ。」

「わたくしは出世がしたいと思つて、京都へわざわざ上つてまいりました。どうぞ一生懸命働きますから、お屋敷でお使いなさつて下さいまし。」

一寸法師はこういつて、ぴよこんとおじぎをしました。宰相殿は笑いながら、「おもしろい小僧だ。よしよし使つてやろう。」とおつしやつて、そのままお屋敷に置いておやりになりました。

三

一寸法師は宰相殿のお屋敷に使われるようになってから、体こそ小さくても、まめまめしくよく働きました。大へん利口で、気が利いているものですから、みんなから、「一寸法師、一寸法師。」

といつて、かわいがられました。

このお屋敷に十三になるかわいらしいお姫さまがありました。一寸法師はこのお姫さまが大好きでした。お姫さまも一寸法師が大そうお気に入り、どこへお出かけになるにも、

「一寸法師や。一寸法師や。」

といつて、お供にお連れになりました。だんだん仲がよくなるうち、何といつても二人

とも子供こどもだものですから、いつかお友達ともだちのようになつて、時々ときどきはけんかをしたり、いたずらをし合あつて、泣ないたり笑わらつたりすることもありました。ある時ときまたけんかをして、一寸法師いっすんぼうしが負まけました。くやしまぎれに一寸法師いっすんぼうしは、そつとお姫さまひめが昼寝ひるねをしておいでになるすきをうかがつて、自分じぶんが殿さまとのから頂いただいたお菓子かしを残のこらず食たべてしまつて、残のこつた粉こなをお姫さまひめの眠ねむつている口くちのはたになすりつけておきました。そして自分じぶんはからつぽになつたお菓子かしの袋ふくろを手ても持もつて、お庭にわの真まなかに出て、わざと大きな声こゑでおいおい泣ないておりました。その声こゑを聞ききつけて、殿さまとのが縁側えんがわへ出ていらしつて、

「一寸法師いっすんぼうし、どうした。どうした。」

とお聞ききになりました。

すると一寸法師いっすんぼうしは、さも悲かなしそうな声こゑをして、

「お姫さまひめがわたくしをぶつて、殿さまとのから頂いただいたお菓子かしをみんな取とつて食たべておしまいになりました。」

といたしました。

殿さまとのはびつくりして、お姫さまひめのお部屋へやへ行いつてごらんになりますと、お姫さまひめは口くちのはたにいつぱいお菓子かしの粉こなをつけて、眠ねむつておいでになりました。

殿さまは大そうおおこりになって、おかあさんと呼んで、

「何だつて、姫にあんな行儀の悪いまねをさせるのだ。」

ときびしくおしかりになりました。するとこのおかあさんは、少しいじの悪い人だったものですから、お姫さまのために自分がしかられたのを大そうくやしがりました。そしてくやしませに、ありもしないことをいろいろとこしらえて、お姫さまが平生大臣のお娘に似合わず、行儀の悪いことをさんざんに並べて、

「いくら止めても、ばかにしていることをちつとも聴かないのです。」

とおいいつけになりました。

宰相殿はなおなおおこりになって、一寸法師にいいつけて、お姫さまをお屋敷から追い出して、どこか遠い所へ捨てさせました。

一寸法師はとんだことをいい出して、お姫さまが追い出されるようになったので、すっかり気の毒になってしまいました。そこでどこまでもお姫さまのお供をして行くつもりで、まず難波のおとうさんのうちへお連れしようと思つて、鳥羽から舟に乗りました。すると間もなく、ひどいしけになって、舟はずんずん川を下つて海の方へ流されました。それから風のまにまに吹き流されて、とうとう三日三晩波の上で暮らして、四日めに一つの

島しまに着つきました。

その島しまには今いままで話はなに聞きいたこともないようなふしぎな花はなや木きがたくさんあつて、いたい人が住すんでいるのかいないのか、いつこうに人らしいものの姿すがたは見みえませんでした。

一寸法師いっすんぼうしはお姫ひめさまを連つれて島しまに上あがつて、きよろきよろしながら歩あるいて行いきますと、いつどこから出てきたともなく、二匹ひきの鬼おにがそこへひよっこり飛とび出だしてきました。そしていきなりお姫ひめさまにとびかかつて、ただ一口ひとくちに食たべようとなりました。お姫ひめさまはびつくりして、氣きが遠とくなくなつてしまいました。それを見みると、一寸法師いっすんぼうしは、例れいのぬい針はりの刀かたなをきらりと引ひき抜ぬいて、ぴよこんと鬼おにの前まえへ飛とんで出でました。そしてありつたけの大きな聲こゑを振ふり立たてて、

「これこれ、このお方かたをだれだと思おもう。三さん条じょうの宰相さいしやう殿どのの姫ひめ君ぎみだぞ。うっかり失し礼れいなまねをすると、この一寸法師いっすんぼうしが承しょう知ちしないぞ。」

とどなりました。二匹ひきの鬼おにはこの声こゑに驚おどろいて、よく見みますと、足あしもとに豆まめつ粒つぶのような小男こおとこが、いばり返かえつて、つツ立たつていました。鬼おにはからからと笑わらいました。

「何なんだ。こんな豆まめつ粒つぶか。めんどうくさい、のんでしまえ。」

というが早はやいか、一匹ひきの鬼おには、一寸法師いっすんぼうしをつまみ上あげて、ぱっくり一口ひとくちにのんでし

まいりました。一寸法師は刀を持ったまま、するすると鬼のおなかの中へすべり込んでいきましました。入るとおなかの中をやたらにかけずり回りながら、ちくりちくりと刀でついて回りました。鬼は苦しがつて、

「あツ、いたい。あツ、いたい。こりやたまらん。」

と地びたをころげ回りました。そして苦しきまぎれにかつと息をするはずみに、一寸法師はまたびよこりと口から外へ飛び出しました。そして刀を振り上げて、また鬼に切つてかかりました。するともう一匹の鬼が、

「生意気なちびだ。」

といつて、また一寸法師をつかまえて、あんぐりのんでしまいました。のまれながら一寸法師は、こんどはすばやく躍り上がつて、のどの穴から鼻の穴へ抜けて、それから眼のうしろへはい上がつて、さんざん鬼の目玉をつつきました。すると鬼は思わず、

「いたい。」

とさけんで、飛び上がったはずみに、一寸法師は、目の中からひよいと地びたに飛び下りました。鬼は目玉が抜け出したかと思つて、びっくりして、

「大へん、大へん。」

と、後をも見ずに逃げ出しました。するともう一匹の鬼も、

「こりやかなわん。逃げる、逃げる。」

と後を追って行きました。

「はッは、弱虫め。」

と、一寸法師は、逃げて行く鬼のうしろ姿を気味よさそうにながめて、

「やれやれ、とんだことでした。」

といいながら、そこに倒れているお姫さまを抱き起こして、しんせつに介抱しました。

お姫さまがすっかり正気がついて、立ち上がろうとしますと、すそからころと小さな槌がころげ落ちました。

「おや、ここにこんなものが。」

と、お姫さまがそれを拾ってお見せになりました。

一寸法師はその槌を手にとって、

「これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何でもほしいと思うものが出てきます。ごらんなさい、今ここでわたしの背を打ち出してお目にかけますから。」

こういって、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、

「一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ。」

といいながら、一度振りますと背が一尺のび、二度振りますと三尺のび、三度めには六尺に近いっぱな大男になりました。

お姫さまはそのたんびに目をまるくして、

「まあ、まあ。」

といつておいでになりました。

一寸法師は大きくなったので、もううれしくつてうれしくつて、立ったりしゃがんだり、うしろを振り向いたり、前を見たり、自分で自分の体をめずらしそうにながめていましたが、一通りながめてしまうと、急に三日三晩なんにも食べないで、おなかのへつてゐることを思い出しました。そこでさつそく打ち出の小槌を振って、そこへ食べきれないほどのごちそうを振り出して、お姫さまと二人で仲よく食べました。

ごちそうを食べてしまうと、こんどは金銀、さんご、るり、めのうと、いろいろの宝を打ち出しました。そしていちばんおしまいに、大きな舟を打ち出して、宝物を残らずそれに積み込んで、お姫さまと二人、また舟に乗って、間もなく日本の国へ帰って来ました。

四

一寸法師が宰相殿のお姫さまを連れて、鬼が島から宝物を取つて、めでたく帰つて来たというわさが、すぐと世間にひろまつて、やがて天子さまのお耳にまで入りました。

そこで天子さまは、ある時、一寸法師をお召しになつてごらんになりますと、なるほど気高い様子をしたりつばな若者でしたから、これはただ者ではあるまいと、よくよく先祖をお調べせになりました。それで一寸法師のおじいさんが、堀河の中納言といふえらい人で、むじつの罪で田舎に追われて出来た子が、一寸法師のおとうさんで、それからおかあさんという人も、やはりもとは伏見の少将といった、これもえらい人の種だということが分かりました。

天子さまはさつそく、一寸法師に位をおさずけになつて、堀河の少将とお呼ばせになりました。堀河の少将は、改めて三条宰相殿のお許しをうけて、お姫さまをお嫁さんにもらいました。そして摂津国の難波から、おとうさんやおかあさんを

呼^よび寄^よせて、
う^じち中^{ゆう}がみ^んな集^あま^つて、
楽^たしく世^よの中^{ちゆう}を送^{おく}りました。

青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一寸法師

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>